



みるトレ 感染症

笠原 敬, 忽那賢志, 佐田竜一 著

● B5 頁200 2015年

定価：本体 3,800 円＋税

[ISBN978-4-260-02133-3] 医学書院刊

感染症は目に見えない微生物との戦いだ。肺炎、尿路感染症、そして風邪。よく出会う感染症も、肉眼ではその微生物は残念ながら見えない。たまに「自分の手には MRSA は絶対に付いていないから」と感染対策の場面に限って見えるかのように言う先生がいらっしゃるが、肉眼的には黄色ブドウ球菌どころか感受性なんてさらに見えやしないので注意したい。

感染症診療の「見えない恐怖」

つまり、感染症の診断・治療の際には何とも言えない漠然とした恐怖にさいなまれやすい。これは感染症診療の避けては通れない現実であり、きれいごとで片付けられないほうがよいであろう。漠然とした恐怖と戦っているのがあなたの心のなかだけならよい。しかし、実際にはその見えない不安から「あの微生物も心配、この微生物も心配、あの感染症も心配」などとなりやすく、いつの間にか抗菌薬はブロードスペクトラムのものになり、風邪に抗菌薬といった不必要な処方になってしまっている。こういう私も、患者の背景情報を集めれば集めるほど、あれもこれも心配になってしまい、ついブロードスペクトラムの抗菌薬に手を出したくなることは多々ある。患者さんにそのような抗菌薬を投与するのではなく、自分にベンゾジアゼピン系抗不安薬を投与するべきであったと反省する毎日である。「可能性を言うときりがない、妥当性の判断を」という岩田健太郎先生の言葉がいつも頭をよぎり我に返るが、見えない恐怖が発生した場合にはそのコン

ロールが難しい。

感染症診療を「見える化する」ノウハウを伝授

このような感染症診療の特徴から、日々の臨床をいかに“見える化”するか？ ということは感染症では極めて重要なテーマであり、抗菌薬適正使用にもつながる。これを実現してくれたのが本書だ。見えない敵を直接“見える化”するグラム染色の効果を発揮した症例を頭にたたき込んでほしい。培養結果を待たずして決着がついているその迅速性の素晴らしさを驚きとともに実感するだろう。グラム染色だけではなく、菌が培地上に作る見た目のコロニーの形態から、ほぼ菌名がわかることが多い。つまり、微生物検査室は最終的な菌名同定・感受性結果が出る前に、たくさんの“見える化”された情報をもっているということを本書から知ってほしい。微生物検査室の技師さんと日々ディスカッションすることで、曇っていた空が一気に晴れわたる症例はたくさんある。微生物が作り出す特徴的な皮膚所見、咽頭所見なども、ちょっと知っているだけで漠然とした恐怖を払拭してくれる。

本書から、見えない敵と戦っていると思いがちな感染症診療からの脱却を目指してほしい。何より、本書には詳細に“見える化”するスキルまで事細かく記載されている。皆さんも日々の感染症診療をどんどん“見える化”し、有名雑誌への投稿を目指してみてもはどうだろうか？ 実はそのノウハウまで、本書は“見える化”されているのである。